

会津戦争と白虎隊の悲劇

島口 健次

会津戦争とは、幕府と朝廷を支え続けた会津藩が新政府軍に徹底抗戦した戦争である。一八六八年五月白河城落城、七月二本松城落城、八月二三日から九月二二日まで約一ヶ月鶴ヶ城籠城戦を行い、降伏した。食糧、弾薬が切れ、会津藩が降伏したのは九月二二日だった。松平容保は「この上は速やかに開城、官軍の陣門に降伏謝罪する」と嘆願書を差し出した。降伏の式典に出席した会津藩の重臣たちは式典の会場に敷いた毛氈を全員で平等に分け合い、この毛氈を泣血氈と名付け、これを取り出しては無念の涙にくれた。戊辰戦争時の会津藩の兵制は、玄武隊（五十歳から五六歳までの武家の男性によって構成された予備隊約四〇〇名）清龍隊（三六歳から四九歳までの武家の男性によって構成された国境守備隊約九〇〇名）、朱雀隊（一八歳から三五才までの武家の男性によって構成された主力部隊約二〇〇名）、白虎隊（十六歳から十七歳の男子で構成、中には一五歳で志願、出陣した者もいた）であった。武器や兵力に勝る新政府軍は会津鶴ヶ城を包囲して八月二一日攻撃を開始する。会津藩は次第に包囲網を狭められ、白虎隊は八月二二日には出撃したが、敗北する。白虎隊の悲劇は新政府軍が白河口から城下に攻め込んだときの戦火を城が落城したと思い込み、飯盛山で自刃（一九名）したことである。この白虎隊の悲劇については、詩吟や演歌などでも歌われているが、十六歳から十七歳の若さで命を終えたことを、今に生きる高校生らはどう考えるか。

厚木歴史研究会では、会津戦争と白虎隊の悲劇を講演会で行っています。